

# 積極化するブラジルの 対アジア・アフリカ外交戦略

内多 允 *Makoto Uchida*

名古屋文理大学情報文化学部 教授  
(財)国際貿易投資研究所 客員研究員

中南米ではメキシコと並ぶ経済大国であるブラジルは輸出拡大を目指して、活発な外交を展開している。貿易やGDPの規模についてはメキシコの後塵を拝しているが(表1)、輸出市場の多様化についてはブラジルがリードしている。

ブラジルは米州地域におけるFTAA(米州自由貿易圏)の構想や中南米地域内の貿易拡大にも積極的に取り組むと同時に、他地域への輸出拡大にも積極的である。本稿では、アジア・アフリカ地域との経済関係強化を目指すブラジルの意図を取り上げる。

## 小規模な近隣市場

ブラジルとメキシコの貿易市場構造については、対照的な違いがある。メキシコの貿易では対米依存度が高く、

輸出総額の約89%、輸入総額は約63%(02年)に上っている(表2)。一方、ブラジルはメキシコのように国境を接している各国との貿易依存度が際立って高くはない。ブラジルの主要な貿易パートナーは米国とEUであり、メキシコのような偏りはみられない(表3)。同表によれば、ブラジルも加盟しているメルコスール(南米南部共同市場)を含むLAIA(ラテンアメリカ統合連合)加盟国12カ国との輸出入シェアは、10%台にすぎない。

ブラジルの対中南米輸出の停滞には、アルゼンチンの経済低迷も影響している。02年はアルゼンチン向けの53%減などが響いて、LAIAへの輸出が19%低下した(表4)。メルコスール域内ではブラジルに次ぐ経済規模を有するアルゼンチン経済が低迷していることが、ブラジルの輸出にも痛手

表1 ブラジル・メキシコの比較

	ブラジル	メキシコ	中南米
人口	175	102	530
GDP	509	618	1918
輸出	58	159	347
輸入	58	176	380

(注) 対象年と単位は次のとおり。なお、ブラジルとメキシコのデータは中南米の内数  
人口：02年央、100万人。  
GDP(名目)：01年、10億ドル。  
輸出入：01年、10億ドル。

(出所) ECLAC と WTO データより作成

表2 メキシコの貿易市場構成(02年)

	輸出	輸入
米国	1430 (89)	1066 (63)
アジア	24 (1)	314 (19)
EU	53 (3)	166 (10)
中南米	43 (3)	61 (4)
その他	57 (4)	80 (5)
合計	1607(100)	1687(100)

(注) 数字の単位は億ドル(輸出入額)( )内は構成比率を示し、単位はパーセント。

(出所) メキシコ中央銀行02年報告より作成。

表3 ブラジルの貿易市場構成(02年)

	輸出	輸入
米国	155 (26)	104 (22)
アジア	88 (15)	80 (17)
EU	151 (25)	131 (28)
LAIA	99 (16)	82 (17)
その他	151 (18)	75 (16)
合計	604(100)	472(100)

(注) 数字の単位は億ドル(輸出入額)( )内は構成比率を示すパーセント。アジアには中東を含まない。

(出所) ブラジル政府総計より作成

となっている。他の中南米諸国の経済状況もブラジルの輸出拡大を期待できそうにない。

このような中南米の状況も、ブラジルが輸出市場の新規開拓を重視する動機を形成している。供給力を拡大している国内産業が育っていることも、ブラジルの輸出推進力となっている。これらには中南米市場での需要を超える供給力を有する分野もある。例えば、ブラジルは農産物の供給国として注目されている。国連貿易開発会議(UNCTAD)が今年7月に発表したthe World Commodity Survey 2003-2004でも、ブラジルが12年後には世界の主要な食糧供給国に発展すると指摘している。

これによればブラジルは世界最大の食料生産国である米国の地位を脅かしている。しかもブラジルの生産者が政府から受ける補助金は米国の場合より35%少ないことを指摘していることから、その国際競争力の強さがうかがえる。ロドリゲス・ブラジル農業大臣は記者会見(03年7月10日)で、同国は03年に米国を追い抜いて世界最大の大豆輸出国になると述べた。

それによると、同年の大豆・同関連品の輸出額は80億ドルを超え、米国

の75億ドルを上回る見込みである。

工業部門においてもブラジルは中南米ではトップクラスの生産力を備えている。豊富な鉄鉱石を背景に、粗鋼生産量は世界第8位(02年2,960万トン)の地位を占めている。自動車産業についてもメキシコがNAFTA(北米自由貿易協定)の生産拠点として発展しているのに対して、ブラジルは南米における拠点として重要な地位を占めている。自動車の生産台数(02年)はメキシコの182万1,000台(中南米1位、世界10位)に次ぐ実績(179万3,000台)を記録(同2位、11位)している。

工業製品が、輸出拡大に貢献している。02年の輸出総額の約70%(420億ドル)が、工業製品である。その主な輸出製品には航空機(輸出額23億ドル、対輸出総額比3.6%)、乗用車(同20億ドル、3.3%)、履物(同15億ドル、2.5%)、自動車エンジン・同部品(同13億ドル、2.2%)などがある。

### 拡大する中国との経済関係

ブラジルでは輸出の伸び率が高い(表4)アジアへの期待が高まっている。アジア市場では日本との貿易が最

大規模を維持してきたが、近年は中国との取引が拡大している。02年の輸出では、中国向けが日本向けを初めて上回った(表5)。同年のアジア向け輸出88億ドルのうち、日中両国への輸出で52%(日本24%、中国28%)を占めた。その前年比伸び率では中国向けが対日輸出5.6%を上回る32.5%を記録した。

開発商工省のデータによれば、03

表4 ブラジルの輸出額伸び率

輸出先	対前年比伸び率
米国	8.0
アジア	26.5
EU	1.7
LAIA	19.3
その他	12.7
合計	3.7

(注)単位はパーセント。  
(出所)ブラジル政府統計

表5 ブラジルの対日本・中国輸出額

	日本	中国
1995年	3,102	1,204
2000年	2,472	1,085
2001年	1,986	1,902
2002年	2,097	2,520

(注)輸出額単位は100万ドル。  
(出所)ブラジル政府統計

年1～7月の期間においてブラジルの対中輸出は前年同期比53%増の25億3,700万ドルを計上した。これは相手国別の輸出では、首位の米国(96億8,300万ドル、前年同期比15%増)に次ぐ規模である。ブラジルの対中貿易拡大には、中国側の旺盛な一次産品の需要が影響している。中国は将来の地下資源や食糧を確保する観点から、中南米との関係強化に積極的である。ブラジルの輸出で、対中輸出が日本向けの額を上回ったことには、中国がブラジルの鉄鉱石輸入を拡大したことも影響している。中国の年間粗鋼生産量は96年以降、日本を抜いて世界第1位の座を確保している。

ブラジルの製造業も中国との経済関係強化に一役買っている。特に自動車と航空機については、中国の生産にも深くかかわりあうようになっている。自動車の分野では両国で生産している欧米系メーカーが、国境を越えた工場間の分業体制を構築している。ブラジル側のGMやフィアット、フォルクスワーゲン(VW)が中国工場に乗用車(ノックダウンによる現地組み立て用)と部品を輸出している。中国はメキシコと並んでブラジルに進出した欧米系自動車メーカーの重要な市場であ

る。ブラジル国内の販売が低迷している現状では、なおさら輸出に活路を見出そうとしている。対メキシコ輸出の大部分は米国向けの組立用であるが、中国向けは全て現地で販売されている。

中国の乗用車市場で最大の販売実績を上げているVWは、ブラジル向けに開発された大衆車(Gol)を上海工場で生産するために02年12月、ブラジルVWから5億ドルの部品調達を契約した。中国製Golの部品の60%が、ドアやシートを含めてブラジル製である。VWがGolを選んだ理由は、ブラジルの大衆車として開発されたこの車種が性能や価格の面で中国市場に最適であると判断したからである。ブラジルと中国の両国で自動車を生産しているメーカーが、ブラジル工場を中国向け部品の供給拠点として活用していることが自動車部門貿易を拡大させている。

航空機分野ではブラジル資本の航空機メーカーエンブラエル(Embraer)が51%の出資比率で、中国国営メーカーとの合弁工場を設立した。中国でもブラジルのように中型航空機が都市を結ぶ重要な交通手段であることが、エンブラエル機の需要を増やしてい

る。エンブラエルはブラジルからの輸出と並んで、中国工場からの供給を増やそうとしている。また、同工場はアジア地域への輸出拠点としても期待されている。

自動車や航空機の生産技術については先進工業国企業がリードしている。しかし市場が要求する製品化については、開発途上国の技術も有益であることを前記のブラジルで開発された自動車や航空機の例が示している。例えば、VW ブラジルでは04年にEUに加盟する中・東欧10カ国への輸出を期待しているが、その市場レベルがブラジル並みであることから中国向けと同じGolが適しており、欧州車は向かないと判断している。航空機についてもエンブラエルの合弁パートナーを通じて、ブラジルから中国への技術移転による南南協力が期待される。

ブラジルと中国の技術交流は前記のような企業間ベースに加えて、政府間の協力では資源探査衛星の打ち上げが既に実現している。この衛星の共同開発からも中国が中南米の資源に高い関心を払っていることがうかがえる。

ブラジル政府はデジタルテレビについてもアルゼンチンと中国の3カ国の共同開発を提案した。02年2月に

ブラジル政府がアルゼンチン政府に提案すると同時に、中国とも接触を始めたことを明らかにした。デジタルテレビの方式選択については、カルドーゾ前大統領の時代から米国・欧州・日本の3方式のいずれにするかについて、検討されてきた。日本方式採用の意見が優勢であることが報道されたこともあったが、最終決定は見送られてきた。これについても、ブラジルと米国は対立している。米国は現在05年発足に向けて交渉中のFTAA（米州自由貿易圏）の協定にデジタルテレビの米州統一方式を入れようとしたが、ブラジルはこれに反対した。

ブラジルのデジタルテレビ市場の規模は、12年間で1,000億ドルという試算もあり、世界の関連メーカーが注目している。南米の大国ブラジルが採用する方式は、中南米全体の放送やテレビ等に与える影響力が大きいだけに、この問題はブラジル国内問題にとどまらない。デジタルテレビ方式を巡る問題はルーラ大統領就任（03年1月）後、ブラジルの独自性主張と先進国を牽制する意図が一層鮮明になっている。しかし、ブラジルは中国・アルゼンチンとの共同開発によるテレビを採用することを決定したわけではな

い。EU との討議のチャンネルも維持されている。サンパウロで開催された（03年7月18日）デジタルテレビ方式のパートナーシップについてのセミナーではEUからも参加して、ブラジル側関係者と接触している。ブラジルはデジタルテレビの方式決定を予定している04年に向けて、これを通商カードに利用することも考えられる。

### 開発途上国を重視する外交を展開

ブラジルは国際社会において中国と並んで影響力が大きいインドとの関係を強化している。また、アフリカ地域との外交活動の拠点として南アフリカ共和国（以下、南ア）との連携を重視している。これら両国へのブラジルからの輸出額は大きくはないが、近年は増加傾向をたどっている。インドへの輸出は95年の3億2,000万ドルから02年6億5,400万ドルに増加した。同期間に南アへの輸出は2億6,100万ドルから4億7,800万ドルに増加した。

ブラジルがインドおよび南アとの関係を強化するようになった動機は、輸出拡大だけではない。両国が国際関係に与えている影響力が大きいことを評

価しているからである。

今年6月にはブラジルでインドと南アの外相を交えた3カ国の連携についての会談が実現した。これら3カ国はG8（先進国首脳会議）に対抗して、G3（途上国首脳会議）構想に同意した。今後は中国とロシアにも呼びかけて、G3をG5に発展させることを目指している。これは開発途上国が結束して貿易や外交問題で先進国の利益が優先されることを阻止することを狙っている。今回の3カ国外相会談では、3カ国合同委員会の設立と、この連携グループの名称をIndia, Brazil and South Africa Dialogue Forum（略称IBSA）とすることに同意した。

ブラジルとしては開発途上国の声を結集する外交活動によって、WTOやFTAA（米州自由貿易圏）、EU等の先進国が関与する通商交渉における立場を固めようとしている。国連の常任理事国が増える場合は、ブラジルがこのポストを確保できるように開発途上国の支持を取り付けようとする意図もある。

インド外相はブラジルでの記者会見で、次のような主旨の見解を述べた。先ず前記のG3については「ブラジルと南ア、インド3カ国は大きな国内

市場を有して、相互補完関係にある。G8のような貿易摩擦は起こらない。地理的にも3カ国は好都合な位置にある」と評価した。また、インドが得意としている産業分野としては「情報技術、バイオテクノロジー、宇宙開発、核開発」をあげ、「ブラジル製のエイズ治療のためのコピー薬品にはインドの技術が応用されている」と指摘した。また、「インドはブラジルの航空機に関心がある」と述べた。なおブラジル・インド両国は02年10月、農業と医学とバイオインフォメーション分野での国際協力プログラムに着手するための覚書に署名している。

ポルトガル語諸国共同体(CPLP)の加盟国であるブラジルはアフリカの加盟5カ国との関係強化を重視している。その中で、アンゴラとモザンビークの経済は南ア共和国との関係も無視できない。ブラジルは南アとの関係を通じて、これらポルトガル語圏諸国との関係も強化されることを目指している。大西洋を挟んでブラジルと向き合う位置にあるアンゴラの石油資源

は、メジャーも注目しており、ブラジル国営石油会社(PETROBRAS)は1979年から原油採掘に進出している。ブラジルは世界最大のポルトガル語人口を抱えている。この人材が豊富なメリットと立地条件を活用して、ブラジルはポルトガル語諸国を含めて、アフリカとの関係を強化しようとしている。

ブラジルはポルトガル語圏には、政府ベースの経済・技術協力を提供している。アフリカ諸国の自然条件が似ているブラジルで、研修の成果が上がることも期待できる。日本のJICA(国際協力事業団)も、ブラジルでアフリカ諸国からも参加する研修事業を実施している。例えばJICAが99~03年度にブラジルの研究機関と実施した毒蛇等の有害動物による事故の治療用の解毒血清の製造技術の技術訓練には、中南米各国と並んでポルトガル語圏5カ国(アンゴラ、カーボベルデ、ギニアビサウ、サントメ・プリンシペ、モザンビーク)からも参加している。